

北斎と広重

—浮世絵風景画の成立—

1. 浮世絵の風景表現の歴史

■浮絵の流行

- ・奥村政信らの浮絵流行
 - ・18世紀前期、中国版画経由による透視図法的空間理解の流入
 - ・主題は室内空間や都市の大通りなどに限定
 - ・透視図法的空間と俯瞰視の併存
- ・歌川豊春による浮絵改良
 - ・1760年代後半
 - ・主題を戸外の風景に拡大
 - ・透視図法による統一的空間理解、低い視点と深い奥行き

2. 浮世絵風景画を生む背景要因と富士山という画題

■浮世絵風景完成の諸要因

- ・行楽、旅行に対する関心の高まり →名所図会の刊行の流行
→風景を見る目の成熟
- ・18世紀前期以後、透視図法など西洋画法吸収の蓄積
- ・19世紀初頭の化学顔料ベロ藍の輸入 →風景の奥行表現に効果を発揮

■江戸の山、富士

- ・東国の都（東都）、江戸の象徴である富士
「半分は江戸のものなり不尽の雪 立志」
- ・「日本橋・江戸城・富士山」の定型構図の成立
- ・江戸八百八講 …江戸庶民の富士信仰の盛行 →富士塚の造営

3. 北斎の「富嶽三十六景」の成立

■富嶽三十六景への過程

- ・河村岷雪『百富士』（明和8年・1771）の影響
富士を見る様々な構図・気象状況・場所 さらに全体の構成も？
- ・狂歌絵本、摺物、洋風版画などで、繰り返し富士を描く

■富嶽三十六景の成立と影響

- ・文政（1818～30）末頃～天保4年（1834）頃
- ・巨匠北斎と大版元の西村屋与八（永寿堂）のコラボレーション
- ・洋風表現と漢画表現（南蘋風）の融合
- ・名所絵における舶来顔料ベロ藍（プルシアン・ブルー）の効果を実証
深い青色で空の高さ・水の深さなど、奥行き表現をはかる

- ・浮世絵風景画（名所絵）ジャンルの確立
美人画、役者絵に次ぐ市場を確立
→歌川広重、歌川国芳らの風景画作画をうながす
- ・大規模一括揃物の成立 →幕末の錦絵揃物の画帖化への道開く
・地理的なまとまりによる配列を想定か？

『今様櫛 雛形』巻末蔵版目録 文政6年（1823）刊
富嶽八体 四季晴雨風雪霧天の造化に縦ひ景色の異なるを筆端に著す

『真佐喜のかつら』江戸末期
唐藍は蘭名をヘロリンといふ。此絵の具、摺物に用ひはじめしは文政十二年よりなり。…（中略）…翌年堀江町式丁目団扇問屋伊勢屋惣兵衛にて画師溪斎英泉（割註：英山門人）画たる唐土山水、うらは隅田川の図をヘロリン一色をもつて濃き薄きに摺立、うり出しけるに其流行おひたゝしく、外団扇問屋それを見同じく藍摺を多く売出しける。地本問屋にては馬喰町永寿堂西村与八方にて北斎のゑがきたる富士三十六景をヘロリン摺になし出版す。是又大流行、団扇に倍す。其ころ外にしき絵にも皆ヘロリンを用いることになりぬ。

『正本製』巻末の西村屋与八の広告文 天保2年（1831）刊
富嶽三十六景 前北斎為一翁画 藍摺一枚 一枚に一景つゝ追々出板 此絵は富士の形ちのその所によりて異なる事を示す 或は七里ヶ浜にて見るかたち又は佃島より眺る景など 総て一やうならざるを著し山水を習ふ者に便す 此ごとく追々彫刻すれば猶百にもあまるべし 三十六に限るにあらず

『富士見百図』広重自序 安政6年（1858）刊
葛飾の卍翁先に富嶽百景と題して一本を顕す。こは翁が例の筆才にて、草木鳥獸器財のたくひ、或は人物都鄙の風俗筆力を尽し、絵組のおもしろきを専らとし、不二はその其あしらひにいたるも多し。此図は夫と異にして、予がまのあたりに眺望せしを其俣にうつし置たる艸稿を清書せしのみ。小冊紙中もせはければ、極密には写しかたく略せし処も亦多けれど、図取は全く写真の風景にて遠足障なき人たち一時の興に備ふるのみ。筆の拙なきはゆるし給へ。

4. 広重の保永堂版「東海道五拾三次」

■広重の名所絵(風景画)への進出

- ・北斎の「富嶽三十六景」の成功により、名所絵に本格参入
- ・天保2年（1831）頃の川口屋版「東都名所」で資質開花
豊かな季節感と繊細な情感がたどる画面

■人気画題の東海道

- ・東海道は浮世絵の人気画題
江戸後期の旅への憧れの舞台は東海道
- ・‘東海道の商品化’化の動き
名所図会ブームの中で『東海道名所図会』刊行
十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』のヒットなど
葛飾北斎、歌川豊広、喜多川歌麿らの先行作
ただし風俗画的な要素が強く、風景描写は概念的

■保永堂版「東海道五拾三次」の新しさ

- ・天保4年(1833)頃、保永堂(竹内孫八)版の刊行がはじまる
当初は仙鶴堂(鶴屋喜右衛門)との共同出版
- ・従来の東海道物にないリアリティ豊かな風景描写
 - ・さまざまな遠近法の駆使
 - ・透視図法(線遠近法)や空気遠近法
 - ・広重らしい繊細な情趣性
 - ・雨、雪、霧、月光など、四季折々の気象状況の設定
 - ・円山四条派の作風を摂取した斬新な構図
 - ・天保前期は歌川派内で四条派絵本がブームになる
 - ・対角線構図の導入や余白の多用

■保永堂版「東海道五拾三次」は実景写生か

- ・幕府の行列に随行して上洛したと定説化していたが…
 - ・リアリティある風景画は写生にもとづくとの思い込み
- ・種本としての『東海道名所図会』
 - ・京都に近づく図ほど図会の挿絵の利用が増える
 - ・名所図会の俯瞰的で説明性の強い図を、巧みな遠近法で実景感豊かに変容させる

■保永堂版東海道の意義

- ・浮世絵の名所絵(風景画)のジャンルを確固たるものとする。
- ・長期にわたる良好な売り上げ
↓
北斎の「富嶽三十六景」が喚起した名所絵ブームを永続化
- ・画帖化された揃物の嚆矢
- ・幕末の揃物の出版と鑑賞形態に影響与える
 - ・広重の作では「六十余州名所図会」「名所江戸百景」等
 - ・版元にとっての画帖化の利点…一括販売による大きい利幅